

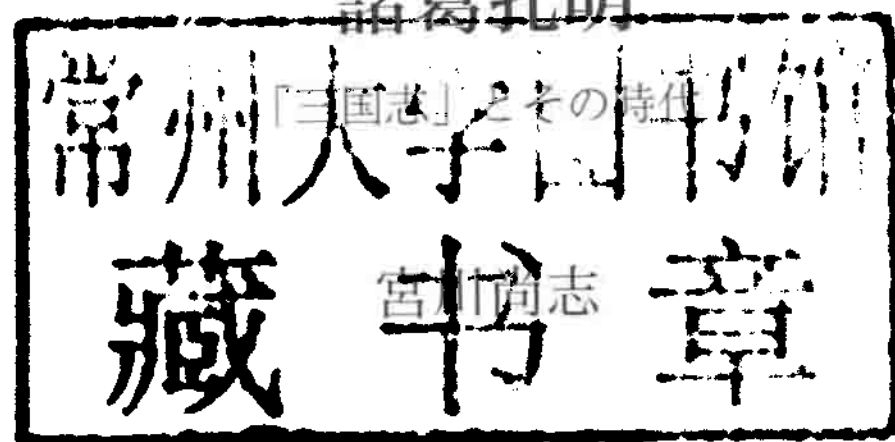
諸葛孔明

「三国志」とその時代

miyakaawa hisayuki
宮川尚志



諸葛孔明



講談社学術文庫

宮川尚志（みやかわ ひさゆき）

1913年～2006年。京都大学文学部東洋史専攻卒業。同大学院を経て、京都大学人文科学研究所助手、岡山大学助教授、東海大学教授を務める。専門は中国史、魏晋南北朝時代。文学博士（京都大学）。単著に『六朝宗教史』『六朝史研究 政治・社会篇』『六朝史研究 宗教篇』『中国宗教史研究 第一』『三国志』、共著に『中国史学入門』『道教の総合的研究』などがある。



定価はカバーに表示してあります。

しよかつこうめい さんごくし 諸葛孔明 「三国志」とその時代 じだい
みやかわひさゆき
宮川尚志

2011年10月12日 第1刷発行

発行者 鈴木 哲

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395-3512

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

装 幀 蟹江征治

印 刷 豊国印刷株式会社

製 本 株式会社国宝社

本文データ制作 講談社デジタル製作部

© Katsumasa Miyakawa 2011 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。なお、この本についてのお問い合わせは学術図書第一出版部学術文庫宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。[R]〈日本複写権センター委託出版物〉

ISBN978-4-06-292075-9

目次

諸葛孔明

新訂版序	3
------	---

改訂版序	4
------	---

初版序	7
-----	---

はしがき	10
------	----

第一章 前半生	21
---------	----

1 その時代	21
--------	----

その生まれた年 漢王朝の盛衰 黄巾と群雄

2 その生い立ち	31
----------	----

家系と少年時代 梁甫の吟 青年時代の交友

3 劉表と劉備	43
---------	----

荊州の政局 劉備の苦闘 荊州の劉備

4 三顧の知遇	54
---------	----

劉備、孔明を知る 草廬対 水魚の交わり

5 荊州潰ゆ 63

劉表の兒子 当陽の乱戦

第二章 壮年時代 70

1 赤壁の決戦 70

江東の孫氏 孔明と孫権 周瑜と孫権 赤壁の火攻

2 孫劉の対立 82

荊州の四郡 周瑜と魯肅 荊州をめぐる係争

3 蜀を望む 90

後漢末の巴蜀 巴蜀をねらう者 劉備の巴蜀進出計画

4 成都に拠る 102

劉備の入蜀 孔明の入蜀 孔明と法正

5 荊州と漢中 110

呉・蜀、荊州を分かつ 曹操、漢中を征す 漢中王劉備

6 関羽の最期 120

関羽、荊州に鎮す 関羽戦死す 荊州の失陥

7 蜀漢の興起 129

昭烈帝即位 昭烈帝呉を討つ 漢軍大敗 八陣図

第三章 晩年…………… 145

1 遺詔を受く 145

白帝城 丞相開府 魏・呉の動きと南中の情勢

2 瀘水を渡る 155

南夷反す 七縦七擒 南中平定

3 出師の表 162

孔明の施政 北伐準備 前出師表

4 街亭と陳倉 177

孟達の失敗 馬謖の失敗 失敗の善後策 後出師表 陳倉の

攻城戦

5 北伐やまず 192

戦線膠着 祁山の会戦 李平を廃す

6 五丈原 205

渭南の対陣 孔明の陣歿 蜀軍撤収 惜しまれるその死 孔

明の子孫

7 孔明歿後の蜀漢 221

孔明を継ぐ者 蜀漢滅亡

8 その遺文 228

諸葛氏集の成立 庭訓 交友論

9 兵要と軍令 233

兵法家としての孔明 軍政と軍令

10 後世の評論 240

同時代人の感想 後代の論賛

あとがき……………250

諸葛孔明年表……………257

参考文献……………262

三国時代要図……………268

解説……………270

渡邊義浩

諸葛孔明

「三国志」とその時代

宮川尚志

講談社学術文庫

新訂版序

本書の初版は私がまだ旧制京大大学院在籍中に出たが、その後、版を重ね、昭和五十三年、桃源社の新版をへて、今度また光風社出版から刊行されることになった。学生のころ夢にも思わなかった四川省成都への旅行も、昭和五十四年早春、「錦江の春色天地に來り」（杜甫）中国語学会の方々に伴なわれて実現した。

成都から昆明への機上、どこまでも続く蜀滇しよくてんの山々を見て、ふと孔明の南征を思い浮べた。諸葛亮の生前の史実関連、死後の評価と伝説、研究史の一切を捜し集めたい衝動を感じるが、目下他に集中することあり。旧態のままで世に送るのは心苦しいが、写真などは光風社出版編集部の尽力で新しくできることを喜びとする。

昭和五十九年三月

著者しるす

改訂版序

本書は昭和十五年十月、富山房の支那歴史地理叢書の八として出した同名の著書の改訂版である。四半世紀を経て、かの小著が大体の骨格を保って再び世に出ようとは思っても見なかったところである。

新版においては旧版の本文の誤記と印刷の誤植を改め、近来の三国志や三国時代の研究の進展を参考し、記述を正した点や、史料を読み直して重点の置き方を変え、削除しまたは追記した点が少なくない。

また文体・用語については、現在の当用漢字・新かなづかい法に改めたが、固有名詞のほか、どうしても旧態を留めた方がよいと思われる場合、当用外の漢字を使用したこともある。また登場人物の言葉も口語に訳さずに文語の面目を残した場合もある。そうした点で新旧・難易が混ざり合うような結果になったのではないかと恐れる。

新版にあたり特記させて戴きたいのは二人の恩師から受けた学恩である。一は旧著

刊行の際の監修者であり、大学卒業後五年目という執筆資格の最低水準にあった私の著作を許容され激励された、故 羽田亨先生である。先生の学徳については、東洋学界のみならず今日なお多くの人の記憶されるところであるからここでは御名前を挙げるのにとどめる。

二は私が京都府師範学校附属小学校において、第二教室の四、五年生ながえ ますじ ろうのとき、担任訓導として、とくに国語・綴方を熱心に指導された、故 長江倍次郎先生である。私の国語力、歴史への興味を育てて下さったのみでなく、寛和・豁達かつたつの御気象による教育愛の精神に基づく先生の言行から受けた全人格的感化は測り知ることができない。のち先生は京都市郁文小学校等の校長を歴任し、旧著刊行の際に一本を贈呈し、丁重な御返事を戴いたことを記憶するが、その後、京都府立大学の病院でお見舞いしたのが最期になった。

当時、先生から教えられた国語読本に諸葛孔明の事蹟や、「白雲悠々去りまた来る。西窓一片残月淡し」ではじまる新体詩があった。この詩は今なお全部記誦できるが、ここでは書くまい。その終わりの節で、「二代の帝みかどにつくす真心、強敵ひし拉ぎて世をしづめんと、三軍進めし五丈原頭」の句があり、そこを私が訳させられた。三軍が進んだという風に訳したのを、「進みし」でなく「進めし」と他動詞だからこそ力強

くなると説明されたことを思い出す。とにかく本書の成る、そもそもの発端は偶然とはいえ、長江先生によつて得られたわけである。

今回、再版を勧めて下さった桃源社、矢貴昇司氏の厚情を思うとともに、旧著刊行に際し羽田先生のほか、編集関係で水野清一・外山軍治両教授、図版関係で内藤乾吉・平岡武夫両教授、また史料解読に関し教示を受けた、那波利貞・宮崎市定両先生の当年の御好意を想起し、深く謝意を述べたい。

昭和四十一年七月四日

著者しるす

初版序

諸葛孔明は恐らく最も吾等日本人に親しまれてゐる支那史上の人物であらう。忠誠無二の名臣として、神算類ひなき軍師として、孔明は後世その國に於けると同じく吾國にも多くの崇敬者を生んだ。彼の名と共に彼の大凡の事蹟もまた世人のあまねく知る所である。殊に後世彼の時代を取扱つた歴史小説である「演義三國志」とか、吾國では「通俗三國志」等の讀物により、彼並びに三國時代の知識は豫想以上ひろく各方面に普及してゐる。

しかし私が本書を著はすに至つた次第は、これら一般の常識の根據であり、歴史の研究にとつて價值ありと信ぜられる各種の史料に直接觸れて、この時代に生きた孔明の人となりを再現せんとすることである。それ故に興味においては少くなるであらうが眞實においては却つて益すものがあらうと思ふ。

ただ困難なる事情は三國時代は今を去る千七百年前のことであり、この時代のことを傳へた史書は數多く現存せず、従つてあるだけの史料を對照したり綜合しても詳細

にわたる事實は研究者自身の理由のある推測を入れて考へない限り明白にならない。然し私が孔明その人の正しい姿を描き出さうと意圖することにおいて眞實を盡さうと努めたことは諒承せられたい。そしてその爲には彼の時代の社會狀態や思想の動向を明かにし、もつて彼の占める地位をその同時代人のそれと共に定置しなければならぬ。故に本書中かなりの部分は孔明自身のことを述べる以外の當時の歴史や地理の敘述にあてられるであらう。とはいへ私はあくまで孔明の傳記を書くことに終始し、彼の生涯の各時期と彼の環境である當時の社會との關聯において生起しきたる事件を説明しながら彼の内的生活の動きをも窺ひ知らうと庶幾した。

これは私が私の對者である孔明を理解せんとすることに外ならない。そして單に私の目の前にある史料の取扱の上からは孔明の理解がでてくるのではないから、本書はつひに私の諸葛孔明傳なのであつて、この書を讀んで下さる方々が私と違つた見方で孔明を觀、或は私の下した判斷について異議を挾まれることはもとより私の豫期し、かつ願ふ所である。

傳記せらるべき價值ある人物の傳記は一、二種あれば足るといふのではない。私は未だ人生の半途にあり、充分に孔明の人格を理解しえたか否か甚だ覺束なく思ふのである。今後私がかはるにつれ私に映じた孔明の姿もかはるであらうし、又私の小著に